

## 『台湾新民報』の右転回 頼慶と新民報日刊初期のモダン化文芸欄

柳書琴／訳・佐藤賢

### 一 はじめに

一九三二年一月、『台湾新民報』（略称：新民報）は日刊紙発行の許可を得ると、四月一五日に刊行され、紙面は中国語を主体に、日本語が三分の一を占めた。日刊紙発行当初、学芸部長の黄周は、林攀龍、頼和、陳満盈、謝星楼の四名の編集員を置き、七面あるいは八面に中文文芸欄を、六面に日本文芸欄を設けた。同紙は一九四〇年一月一日以前の散逸が深刻であり、文芸欄は一九三二、一九三三年の日刊初期の数ヶ月分が存在するのみである<sup>1)</sup>。

一九三三年五月、日刊化後一年してまもなく、漢文欄に日本内地人が台湾人留学生を詐欺にかける新聞小説——「美人局」

が現れた。作者である頼慶は、流麗な中国白話文によって、連載三ヶ月、総文字数約五万字のこの小説を執筆し、九月一日には、別に三百回にも及ぶ日本語長編小説「女性の悲曲」を連載している。頼慶というこの流星のごとく現れそして消えていった作家とは誰なのか。「美人局」は、またいかなるメディア環境の下で産み出されたものだったのか？

新民報は日刊紙発行後、絶えず『台湾青年』から『台湾』、『台湾民報』へと十数年に及ぶ民族運動メディアとしての輝ける歴史を標榜しながらも、実際には、一九二〇年後期に絶えず左右に分化していた民族運動の中において、とうに『台湾大衆時報』などのラディカルなメディアによって締め出されてしまっていた、と筆者は考える。日刊紙発行後の現実はさらに同紙

の右転回を促し、「台湾人唯一の言論機関」という本土言論大手は新しい社会現実の中で新しい針路を模索していたのだった。

新民報は、日刊紙発行当初、少なくとも以下の三つの挑戦を受けた。第一は、右からのもので、台湾総督府は、新聞・雑誌を管理、検閲、支配していた。第二は、中間からのもので、映画、ラジオ、レコードは文字メディアと競合関係にあった。第三は、左からのもので、後退中の左翼陣営は新民報社を支える台湾地方自治連聯（略称：自聯）の穏健な政治路線を批判していた。新民報社は、一方で「週刊紙」時代の批評的メディアの伝統を維持することに努めたが、もう一方で、「日刊紙」の即時性や大衆性、商業的な潜在力を掘り起こし、エリート階層から識字階層へと読者層を拡大しようと試みた。社説は、一貫して台湾人の立場を反映した急進的な論調によって、民族運動のメディアを標榜する外観をなしていたが、文芸欄は、大衆の消費文化と啓蒙的教化の伝統を結びつけ、大衆化路線を演習する裏庭であった。そのため、新民報は低調に右転回を進めたが、その変化の容貌は文芸欄に余すところなく現われていた。

新民報は三つの挑戦に直面したが、第一のものについては、すでに李承機の精緻な研究がある<sup>2)</sup>。第二のものについては、多くの芸術・文学の個別的な研究が蓄積中であり、総合的な解釈がなされることを待ちたい。第三のものについてはいまだ研究

が展開されていない。本稿は、第三のテーマについての関心を喚起することを目的とし、「台湾の菊池寛」を志向した作家頼慶を取り上げ、ファシズムの抑圧の下、行動力を失った民族運動左派と地方自治運動へ後退した民族運動右派の両者の争いが日刊文芸欄の位置づけに一定の影響を与えたことを指摘したい。「頼慶の発掘」をとおして、筆者は、一九三〇年代の文芸誌と新聞文芸欄の分化、新民報日刊の右転回を描き出し、同紙文芸欄が当局の圧力と左からの批判という挟撃の中でいかに大衆文学の園地を創り出そうとしたのか、政治運動衰退後のイデオロギー闘争がいかに後退して文壇を主戦場としたのか、そしてプロレタリア作家の新民報とその文芸欄への不満が、またいかに文学場における同盟と再分裂を刺激したのかを説明したい。

## 二 航路、美人、モダンボーイ

### ——漢文欄連載小説「美人局」

「美人局」は、頼慶がはじめて日刊紙の連載を獲得した小説で、また彼の大衆小説家としての地位を確立した作品である。現存するのは、三八回、三九回を除く、第一回から四十四回で、一九三三年五月一日から七月八日にかけて連載されており、第四五回以降は、新聞紙が保存されていないため、結末と連載終

了の時期ははっきりしない。小説が描くのは、士林の財産家の子弟で日本の慶應義塾大学経済科一年生の台湾人留学生である林資元が、夏休みが終わり船に乗って東京に帰る途中、日本人の男女二人組による詐欺に遭う物語である。保険会社の外交員を自称する中年の男「中村」と日本女子大学の学生という二十歳くらいの女「百合子」は、もっぱら門司から神戸の内海航路と神戸から東京の鉄道の道中において、台湾の財産家の子弟にねらいを定めて詐欺をおこなっている。

この鴛鴦詐欺師は、兄妹を装っている。「兄」である中村は、内海航路上で裕福な留学生を物色し、友人となって、神戸に上陸した後自宅に自休することを勧める。続いてモダンで魅惑的な「妹」である百合子が出迎え、ロマンティックな出会いが演出される。そして、二人は連れだつて上京することになるのであるが、夜行列車の中で、百合子は媚態をつくり、夜明け時食堂車の通路で転ぶふりをして、倒れた資元の懐から一瞬のうちに財布を盗み去ってしまうのであった。翌年の三月、資元と慶応義塾大学予科の学生で、財産四十余万円の台湾の大地主の息子である洪明宏は、東京で「中村兄妹」と偶然会う。明宏もまた百合子の獲物であり、中村が巧妙に二人を別々に分かれさせると、明宏と連れだつて銀座の街へ女遊びに出かけ、機に乗じて明宏の財布を盗むのであった。百合子は資元の部屋へ向い、情

交を結ぶと預金通帳を盗み去る。その後わずか数週間のうちに、百合子は色香で巧妙に渡り合い、二人の「台湾の大若旦那」は恋敵同士として争い、最後には争って台湾の家族に五千円の結婚準備金を支度するよう求めるのであった……。

小説の結末は分らないが、「美人局」とは、美貌を餌にし、性的関係によって陥れる詐欺の口口であり、そのために男たちはおそらく人も財産もなくしてしまい、さらに誣告に遭ったのかもしれない。台湾―下関―門司―横浜―東京という「東京へ向かう」典型的なルートの、その航程の特徴および移動主体の植民地主義的な心理は、詐欺が成立する基礎となっている。一九三〇年以降内地と台湾の間の物資と旅客の移動は日増しにはげしくなり、旅客は春の行楽期と夏休みの前後に集中し、満員・定員オーバーが常態化していた<sup>3)</sup>。小説中の学業を怠ける林資元、洪明宏は、中学時代から日本へ赴いている日台航路上の常客である。しかしながら、追風(謝春木)が「彼女は何処へ」<sup>4)</sup>において描き出した女性解放を提唱する先覚者とは異なり、彼らは一九三〇年代の就職難を背景に生まれた墮落した台湾人留学生の典型であった。

日台航路は基隆から門司まで七四〇海里あり、航行時間は約四六―五二時間を要した。一九三三年当時、朝日丸の総トン数は九、三二六トン、九五五名の船客を収容できた。留学経験の

ない頼慶は、東京旅行の経験を基にして、旅程の特徴を詳細に描き出している。まず、客船は下関に到着する前、荒波すさぶ玄界灘を通らねばならないが、船酔いを経た後、さらに「門司連絡船」に乗り継ぎ、門司へと到着する。そして門司から汽船に乗り換えると別の景観となるのであった。静かで風ぐ瀬戸内海は旅の疲れを払い去り、曇りのない鏡のような風景は気持ち愉快にし、一晩の平穩な船旅の後、汽船は明け方に神戸港に到着する。

中村は、船客が警戒心を解く最後の旅程で、リンゴを分け与える機に乗じて大学時代の女郎買いの経験を大げさに話し、資元との距離を縮める。彼は赤いリンゴを剥きながら、資元が赤い頬の日本娘がとて美しいと賛嘆するのを聞く。中村は資元の内地女性に対する「変態的性欲」をからかいながら、巧みに自分の妹が「流行を追いかけて過ぎるはずばな娘であり、どんな男とでも親しくなり深い関係になってしまふ」ことを話題にする。それは資元の宗主国の女性に対する崇拜にさらにモダンガールが性に対して開放的であるという幻想を加えて、ますます欲情させる。彼の眼には、中華美人も台湾美人も、日本美人には及ばないのであった。神戸上陸後、彼は案の定無邪気で大胆な百合子に夢中になる。百合子は東海道本線の夜行列車の薄暗い雰囲気の中で、自らの獲物に桃色の網をかけるのだった。

美人局は、当時の台湾の通俗小説においてよくある話のタイプではなく、日本のモダンガールの性的イメージを餌に集団的な詐欺をはたらく物語としては初めてのものではあった。この一九三〇年代にビークに達する留学生の越境的移動現象を題材にした小説は、リズムは明快、文章は扇情的であり、帝国地理の大空間と留学生の日常生活のディテールをありありと描き出し、言情小説と探偵小説の長所を兼ね備えている。頼慶は一つの詐欺物語を利用して、お坊ちゃん留学生の盲目的なモダンの追求を批判し、植民地男性の日本女性に対する病的な崇拜を展開したが、「美人局」は、俯瞰的な帝国地理の空間において、植民地主義的な幻想とハニートラップを利用して、当時としては、性情欲、肉体についての描写が非常に露骨な物語を編んだのだ。頼慶は、彼の「エロ」「グロ」現象が氾濫する東京の乱雑な世相、および植民地主義的な性癖に対する風刺を、「肉感」溢れる筆法によって表現し、ボルノ感にあふれたこの小説は、初めて美術記者として招請された林錦鴻の挿絵を配して、読者に視覚的、生理的な刺激を与えたのだった。

「美人局」は特殊ではあったが、特例ではなかった。一九三三年五月以降の新民報を繰ると、文化的、生活的なもの、娯楽的なものの双方を考慮していたことが分かり、漢文欄と日文欄のどちらも挿絵、写真、美術作品が頻繁に見られる。上海、東

京、欧米の流行情報、男女関係をテーマとした大衆小説、裸女像を含む現代美術、日本語の外来語新語の大量使用などは、現代感と洋風の雰囲気をも漂わせていた。そのことは誌面やヴィジュアルが少なく、機能が単一的で、海外的な感覚に欠ける『新高新報』（略称：新高報）や『南瀛新報』（略称：南瀛報）などの週刊文芸欄を対照的に見劣りするものとしてしまった。モダン化は、日刊化から一年後、現代副刊の機能を兼ね備えた新民報文芸欄の最も顕著な特徴となった。

一九三二年五月三十一日までの新民報文芸欄は週刊時代から続く中国の新文芸を転載紹介し、日本の左翼文学動向に関心を払うといった伝統を保持していた。惜しむらくは、日文欄に連載された「島の子たち」（一九三二・四・一八〜五・一七）、楊達の「新聞配達夫」（一九三二・五・一九）不詳）が、題材が社会主義運動にかかわっているとして発禁処分を受けたことである。新民報文芸欄は島内読者や知識人の期待に応えつつ、警務局からの検閲制度による警告にも向き合わねばならず、そのため一九三二年七月前後に転回を始めたのであった。そして大胆な新人の起用という突破的な試みは、「台湾人式の新聞小説」をつくり出し、その第一弾が林焯焜の小説『争へぬ運命』であった<sup>55</sup>。新民報社政治部長の呉三連からの招請を受けて執筆されたこの小説は、一九三二年七月から半年間連載されると、翌

年四月に、「台湾で始めての新聞連載長編小説」と銘打って、単行本として出版された。そして続く第二弾が林敬璋の「歎きの白鳥」であり、第三弾が頼慶の「女性の悲曲」であった。中文欄においてはさらに早くから本島作家の中編小説の連載が始まっており、一九三三年四月に陳泗汝「情愛的月份牌」が世に出、五月には頼慶の「美人局」が出現した。その他に現存する作品として、林越峰の「最後の喊声」と簡進発の「革児」があり、短編方面となると数えきれない。頼慶をはじめ、林焯焜、雞籠生、簡進発、陳鏡波、林敬璋、陳泗汝、郭水潭、楊守愚、林越峰らは、同じく『台湾新民報』日刊初期の代表的な作家であったが、楊守愚、林越峰らベテランをのぞくと、頼慶らはみな新鋭であった。

新聞連載小説は、新民報文芸欄のモダン化の顕著な指標であり、特に長編が注目されるが、文壇の評価は二様ではなかった。当時新民報台北本社取材記者であった劉捷は唯一大衆文学の角度から、頼慶に高い評価を与えた人物であった。彼は「頼慶氏（北屯）は台湾の菊池寛を以て自他共に許してゐる。努力の人長谷川海太郎、そつち除けの精力家であるらしい<sup>56</sup>。」と書いている。しかしながら、劉捷は個別の作家に的確な評価を与えているものの、新民報文芸欄に対しては、「郷土文学」の大義名分によって不適切な概括をあたえるだけであった。それは、

その当時大衆文学が望ましくない方向と考えられていたことを意味している。

文学者はどのようにモダン化を扱ったのだろうか？ 早くも一九三二年九月には、モダン化という新しい方向は受け入れ難いものであると考える作家が存在した。郭秋生は、「我々の唯一の言論機関が、もはや時代の最先端のモダンボーイとなってしまった。ひょっとすると週刊新民報の最後の一日に変わってしまったのかも知れない」と指摘した。左傾化路線という袋小路に入り込んだ後、郷土文学と大衆文学は新民報文芸欄の二大方向性となったが、郷土文学の主張者であっても大衆文学が「台湾の喉舌」となるという言葉は受け入れられなかった。日刊文芸欄の世俗に媚びる方向性は、彼に「モダン化⇨反動落伍」というロジックを導き出させた。彼が描き出した「モダンボーイ」の豹変史は、当時の作家たちの普遍的な失落感を叫び出したもので筆者が要約すると次のようになる。

雑誌新聞の発展史	比喩(台湾話文)	語義
台湾青年(月刊雑誌)	看牛团仔	小牧童
台湾(月刊雑誌)	司仔工	小丁稚
台湾民報(半月刊、旬刊、週刊)	仔店的小辛勞	雜貨店の小店員

台湾新民報(週刊)	彩帛店顧店口	綿布問屋の従業員
台湾新民報(日刊、現在)	瀟洒漂亮的會社員	上品で小さいな通勤族
台湾新民報(日刊、未来)	時代尖端的摩登男	流行りの男性
	紳章賜佩的候補者	準名士

頼慶は、大衆小説を研究し、小説によってモダンボーイを批判したが、彼の企図は誤って邪道に入ったと見なされ、大衆文学という新しいジャンルを推進する新民報もすぐにモダンボーイの悪評をこうむることになった。新民報は最大の本土文芸の園地を開いたが、いかにかつての新文学運動における指導的地位を維持するか？ いかにか最大多数の読者大衆を獲得するか？ 左傾化か右傾化か、プロレタリア文学や郷土文学かそれとも大衆文学か？ それらはすでに新聞社が主観的に決定できる問題ではなかった。当局の「左を抑圧して俗を揚げる」という検閲管理の下、新民報社はモダン化の外套を着ざるを得なかったのである。頼慶もまたこの新聞の文芸欄同様、自らの道と戦略をさがし出さなくてはならなかった。引き続き、我々はこの作家を知ることから、一九三〇年代の文学場における分離と結合の暗号をさがし求めたい。

### 三 頼慶とは誰か?——『台湾新民報』日刊作家

頼慶とは誰か? 一九八一年に書かれた四百字程度の簡単な紹介以外に<sup>8)</sup>、芸術界は彼についてほとんど何も知らない。筆者の調査によると、頼慶は台中州大屯郡北屯庄の出身で、一九二二年三月に台北師範学校本科国語部を卒業している<sup>9)</sup>。生没年は不詳だが、一九〇二年、一九〇三年前後の生まれと推測できる。一九二二年から、霧峰公学校、大里公学校、軍功公学校大分教場、北屯公学校で教鞭をとっている<sup>10)</sup>。一九三〇年四月に教職を辞すると、一度東京を巡り、日本へ赴き文芸を学ぶ可能性を模索するが、最終的に経済的事情を考慮し島内で努力することを選択する。頼慶の作家人生はわずか三年あまりと短い<sup>11)</sup>が、作品を集中して発表するなど、驚くべき活力をみせている。一九三一年七月から一九三四年一〇月まで、筆者が発見した作品は、長編小説が一編、中編小説が一編、短編小説八編、雑論一〇編、図書紹介二編、随筆二編、郷土誌一本の計二五種である。頼慶の芸術界でよく知られた作品は少なく、いまだ多くの作品が未発掘のままである(「附表一」を参照)。

一九三一年、頼慶の最も早い公刊された作品「鬭争意識」は新民報週刊に発表され、社会的弱者の児童の学業中断問題を検討したが、そうしたテーマを描く尺度を掌握していなかった

めに第二回と第四回は全編削除に遭っている<sup>12)</sup>。一九三〇年から一九三四年、台湾では日本の郷土教育運動の影響を受けて郷土誌を出版するブームが現れたが<sup>13)</sup>、頼慶は北屯公学校の校長が主宰する計画に参加している。一九三二年一二月に『北屯庄郷土誌』が出版され、彼が執筆した個所は一割を占め、さらにその多くが実地調査やインタビュー、清代漢籍の整理などが求められるものである<sup>14)</sup>。

郷土誌の編纂は頼慶の郷土意識を刺激し、自聯幹部として、政治運動及び中部の住民に広く接触させた。一九三〇年八月、台湾民衆党右派分子は別に台湾地方自治聯盟をつくり、州市街庄レベルの地方自治を実現することを目標としていた。「祖国派」や「台湾革命派/台湾共產党」に対して、自聯は、島内の社会改革をとおして民族文化の活力を維持する「待機派」に類別され<sup>15)</sup>、成立後、たびたび孫文の「農工扶助」路線をとる民衆党および共產主義系の台湾文化協会、台湾農民組合などの左翼団体によって批判されたが、一九三一年以降はむしろ合法運動を推進できる数少ない団体であった。頼慶が自聯に加入した時期は詳らかでないが、一九三二年の時点ですでに主要な幹部であり、その年の五月に成立した台湾全土一五支部の一つである北屯支部の主幹として、二四四人の盟員を率いており、北屯支部は、台北、南投、台中支部といった支部に次ぐ活発な支部

であった<sup>15)</sup>。

一九三二年七月一九日、自聯は全島巡回演説会を竹山において開始し、当地の信仰の中心である媽祖廟前で「政談大演説会」を開催した。頼慶は弁士をつとめ、楊肇嘉、葉榮鐘、張景源、洪元煌ら自聯のリーダーに従って赴いている。その晩は約五百人前後の民衆が集まったが、突然、文化協会や農民組合の会員らが会場で反対のピラ千枚をまき、「自聯を打倒する歌」を歌い、弁士を侮辱するなど、大声で騒ぎ立てた<sup>16)</sup>。妨害者たちは取り締まられたが、講演者の情緒と予定の議題は乱されてしまった。聴衆は黙りこくり、洪元煌や頼慶の演説は中止となり、最後にドタバタ劇として『台湾日日新報』に掲載されるなど、全くの失敗といえるものとなってしまった。

一九三二年頼慶は科学普及の短文、図書紹介、文壇への提言を発表し始めると同時に、『台湾新民報』『台湾新聞』文芸欄において、頼明宏、陳鏡波らと台湾の女性問題について論争するなどし<sup>17)</sup>、文壇でその名が知られるようになる。一九三三年三月、頼慶は新民報に「骸の恋」を発表すると、次々と小説を発表し出す。二年間に一〇編の小説を発表し、そのうち六編が新民報に掲載された。毎日の発行数が二万三千部前後で、一九三四年には三万部を突破した新民報日刊は、頼慶の最も主要な舞台となり、彼の六割をこえる作品が発表されている。発行数が

数百から一、二千部の新文学雑誌に比べ、日刊の影響力は圧倒的であった。一九三三年五月から翌年まで続いた「美人局」「女性の悲曲」は、画家の林錦鴻、顔水龍の挿絵を配し、長い期間文芸欄の焦点となり、頼慶も一躍著名な大衆作家となった。『台湾新民報』は自聯旗下の新聞であったが、一九三三年七月二三日の改組後の自聯は、運動を強化する目標のため、台中市「楽舞台」において「全島住民中部大会」を開催するとともに政論演説会を開催した。前の週には台中州各地で宣伝ピラ三千枚、台中市では二千枚をまき、二三日午後、葉榮鐘が開会を宣言し、楊肇嘉を議長に推すと、弁士一五名が席に着き一〇分間ずつ演説をおこなった。多くの弁士は演説中に止められたが、聴衆は九五〇名にも達し、人数は最多となり最も成功したものの一つとなった<sup>18)</sup>。頼慶は「最後の五分間」と題した演説をおこなったが、そのときこそまさに「美人局」の連載が終わろうとしていたときであったのだ。このことから、頼慶は文芸欄のモダン化の順風の船に間に合い幸運にも有名となった新人ではなく、政治的立場や運動の経歴からみるなら、彼もまたまぎれもない「台湾新民報日刊作家」の一人なのであった。

『民衆法律』月刊は、頼慶が法律小説という奇怪でつかみどころのない作品をとおして法律の常識を普及する園地であった。頼慶は一九三三年五、六月から「争屍」を発表し始め、男性の



異性交身譚「活ける屍」、東京行きを諦めるまでの葛藤を描いた随筆「僕の悩み」と続々と作品を発表する。同じ年の九月に、頼慶は同雑誌の嘱託として招聘されるが、頼明弘、林越峰が相次いで新高報に引き抜かれると、一〇月から主筆として改めて招聘されている。そのほか、七月二日に頼明弘が新高報に入ったとき、頼慶も嘱託記者として招聘されているが、著作物は少なく、任期も不明であり、後に文芸欄の編集に昇進した頼明弘とは比ぶべくもない。また、『民衆法律』の職にも頼慶はその年の年末まで就いただけである。

一九三四年五月六日、第一回全島文芸大会が開催され、台湾文芸聯盟（略称：文聯）が成立すると、頼慶の文壇での地位は頂点に達した。頼慶をはじめ、頼明弘、張深切、何集璧、林越峰、黄再添らが文聯の主要な推進者であった。当日は七〇名近い文芸関係者が出席し、頼慶は台中駅で文学者の友人らを出迎え、大会では開会の辞を読み上げ、張深切が大会の準備の経過を報告し、頼明弘が会員を紹介した。また、全島で一五名の執行委員が選出され、その中から常務委員五名を推挙し、頼慶、頼和、張深切、頼明弘、何集璧らが選ばれた。

ただ、文聯成立後、頼慶は運営業務と編集業務に参加せず、『台湾文芸』にも発表していない。一九三五年五月文聯は分裂し、一二月楊達が別に『台湾新文学』を創刊し、頼慶、頼和、

頼明弘ら十数名の作家が編集に名を連ねたが<sup>19</sup>、頼慶はまたも編集業務に参加せず、作品も発表せず、完全に消息を絶つ。そして、一九三七年六月以降、同誌の停刊にともない、頼慶の名は文壇から跡形もなく消え去ってしまう。筆者の調査によると、頼慶は後に「北屯信用販売購買組合」で職に就くが、一九四二年三月に離職しており、その原因は不明である<sup>20</sup>。

一九三三年七月二日、新高報は彼が執筆した「休夏中の留学生」という一文を掲載している。その文章は日本の各レベルの学校の台湾人留学生の人数を紹介し、夏期に中国、日本から台湾へ戻る留學生が約千名であると指摘している。彼はそうしたブルジョア階級の「浪漫学生」が「海外で流行する不良な気風を台湾において伝播させ、モダンで流行の行為であるとし」、社会問題を生んでいると批判する。そして、留學生が夏休みを利用して演説会を開催し、島内を視察旅行し、名士を訪ねるなど、彼らに台湾の問題を研究し、台湾の実情に適した学問をさせるべきであると建議している<sup>21</sup>。この短い批評は「美人局」の創作意図を告白するごときもので、頼慶は、台湾の上層階級の青年の頹廢した生活と精神的な欠落をからかい、支配民族の巧みな強奪や道徳の貧窮するイメージを描き出したのだった。大衆文学の形式によって「美人局」の批判的な意図は露骨にならなかつたが、作者の真剣な創作動機と社会的視点は疑う余地

もない。

頼慶の文芸活動は、郷土誌の編纂や社会運動、記者の仕事の間に織り込まれたものであった。彼は書齋型の作家でもなければ、商業流行作家でもなく、文学を社会実践の手段とする島内作家の一つのタイプであった。新人作家から文聯の推進者へと、彼の急速な台頭の理由には、個人の努力のほか、新民報と自聯が彼にもたらした文芸資本と社会資本を小さく見てはならない。しかし、彼が受けた批評、文を棄て商についた結末もまた、彼が背負った「新民報日刊作家」という刻印と関係がある。なぜなら、プロレタリア運動の後退期に、新民報およびその文芸欄の右傾化に対する批判は、プロレタリア作家によって、同志を結集させ、再び陣容を整える最もよい言説と見なされたからであった。

#### 四 左右身処し難し——文聯の成立と再分裂

頼慶のフェイドアウトは、左翼戦線および週刊紙の新民報に対する排斥と関係がある。李承機は新民報日刊が批判を受けた原因を次のように指摘している。第一に、日刊と週刊とはメディアの性質が異なり、新民報日刊が「評論中心」から「報道中心」へと転換し、ラディカルさを失ったことがある。第二に、

総督府は本土メディアを抑圧し、一九二八年から一九三二年の間に島内週刊および内地日刊の台湾号外の発行を許可したが、それらは新民報と競合関係にあり、妨害となった<sup>20</sup>。李承機は総督府による「新聞を以て新聞を治する」というメディア統治戦略を提示しているが、本節では頼慶を例にその戦略が効を奏したのも、左翼進歩的言説が言論界の前衛を占め、台湾民族運動陣営において左右による闘争が続いていたからであることを説明したい。

頼慶は早くも文聯成立当初から、張深切との間に溝を生んでいた。台湾文化協会（一九三三・一〇〜一九三五・一）の創刊号『第一線』『文壇スミメ』には、頼慶が、『台湾文芸』『喫煙室』が「口吃、破靴、破帽子（吃音、破れ靴、破れ帽子）」という文章を揶揄したことに憤慨して文聯と絶交したと記載されている<sup>21</sup>。一九三五年二月、張深切は「編輯後記」で弁明を公開し、頼慶が病気にかかった数ヶ月の状況を説明しているが<sup>22</sup>、彼が頼慶を批判したのは一度だけではなく、さらに頼慶の作品が表題に驚かされるだけで実際の内容は平凡であって白話文も上手くないなどと酷評している<sup>23</sup>。

張深切より前にも、一九三二年七月、文壇に登場したばかりの頼慶は論争に参加したことから頼明弘の批判を受けている。頼明弘は、『晝鐘』『台湾文学』が「台湾のプロレタリア文学」

を代表し、『台湾新民報』が「ブルジョア文学」を代表すると、文壇の二大陣営を描き出し、暗に頼慶に「投降」をすすめた<sup>25)</sup>。

彼は絶えず「我々の文学」「我々の大衆文学」「労働者のよき伴侶である大衆文学」などの言葉遣いで、『台湾文学』『曉鐘』以来のプロレタリア文学の系譜を強調した。彼が新民報を批判するとき、「恋愛信箱（恋愛私書箱）」は再度標的となった。また「台湾話文の実験場」を自負する『南音』も彼によって「ブルジョア文学の屍」「御用文学の残滓」などの非難を受けている。彼は、自然主義、ロマン主義、自由主義、アナキズム、ファシズムは、いずれも我々の文学ではないとし、「我々の唯一の文学はプロレタリア文学である」と言明した。彼の論旨は、まず「我々の」活動の舞台をうち建て、そして『台湾新民報』と『南音』を打倒することにあつた<sup>26)</sup>。

「プロレタリア文学」と「ブルジョア文学」の対立構図の下、頼明弘から「我々の毓文」と称された廖漢臣、また「我々台湾のプロレタリア作家」である文苗（朱点人）も相次いで頼慶を批判した<sup>28)</sup>。頼明弘から「同志」と呼ばれた林越峰は、当時数少ない新高報と同時に新民報でも活躍した作家であり、頼慶を批判することはなかったが、毓文とともに新高報に集められ、一九三三年一月一日から漢文支社の記者を務め始めている。

頼明弘は新高文芸欄において『台湾文学』（一九三一・八〜一

九三二・二）およびその後身である『南海文学』（一九三三・一〇〜）を高く評価し、「台湾を啓蒙しようとする文化」として『フォルモサ』を紹介し<sup>29)</sup>、また力を入れて毓文が主編をつとめる『先発部隊』（一九三四・七）を推薦した<sup>30)</sup>。つまり、それらはプロレタリア文学の一員あるいは友軍と見なされたのであり、ただ新民報が「霧峰系収租派的社会主義者」であると嘲りを受け、『南音』がその「手下」として嘲笑われたのであつた<sup>31)</sup>。

一九三三年以降、頼明弘の新高文芸欄と『台湾文学』における地位は日増しに重要となつた。毓文はかつて、人は張深切、頼明弘、頼慶を「文聯の三羽ガラス」と呼んだが、実際には張深切、頼明弘、張星建、徐玉書こそが本場の「四大柱」であつたと指摘している<sup>32)</sup>。まとめると、頼慶のフェイドアウトは病気のほか文聯の核心的分子との間の派閥争いと関係があつたのだ。一九三二年から一九三四年の間、頼慶が受けた批判は、プロレタリアの立場を自任する作家や記者が新高報を陣地として、新民報および自聯を背景に持つ作家を排斥したことをはっきりとあらわしている。頼明弘、張深切はみな『台湾文芸』の主宰者であり、二人はそれぞれ新高文芸欄および『台湾文学』で編集業務を担っており、この一新聞一雑誌はちょうど新民報文芸欄の主要な批判者であつた。

日本人資本の『新高新報』は、新民報日刊の激烈な反対者の

一つであった<sup>33)</sup>。同紙は一九三二年一月四日に新民報日刊が許可を得た消息を発表した時から、新民報の人事異動を資本主義機関の派閥争いと解読している<sup>34)</sup>。四月一四日、日刊が世に出る前夜、同紙は赤道報社、工友総聯盟台南区、赤坂労働青年会が「台湾新民報不読者同盟」の準備会を開催したと困み記事で強調した<sup>35)</sup>。翌年三月、自聯が解散するとの誤伝が出ると、同紙は土着資本主義機関の動向とプロレタリア階級は無関係であると皮肉っている<sup>36)</sup>。また四月、新民報一周年時には、台北維新会青年部、台北労働青年会が道行く人に「解剖台湾新民報（台湾新民報を解剖する）」というピラを配っているという消息を伝えている<sup>37)</sup>。類似したマイナスの報道と批判言論は『南瀛新報』においてもまったく同じである。

新高報と南瀛報の批判言論の共通する特徴は、台湾人を利用して戦線の矛盾を左右し、反自聯／反新民報の言論を拡大伝播していることである。両紙の自聯に対する批判は、それらの新民報に対する批判と表裏一体の関係である。そのような言論は新民報文芸欄の各種の批判言説の中でも最も攻撃的なもの一つであった。民族系の新聞雑誌の発展を嫌った日本人資本の週刊行物は、階級という刃を利用し、台湾人間の矛盾を助長した。左右の争いと新聞業の利益の争いは、そのとき区別することが難しく、相互に利用されたのだった。

新高報を例にすると、新任の主筆であった唐澤信夫は「台湾人に同情する」立場を標榜し、台湾人の進歩作家のためにポストを獲得したが、結果的にそれは反新民報の言論を作り出し育てるプラットフォームと変わりなくなった。日本人資本の週刊行物は左翼言論を黙認し、それによって右翼の民族運動陣営と本土日刊を攻撃させたのであり、台湾の左翼人士は週刊の紙面を利用して、左翼言論の陣地を再建したのであった<sup>38)</sup>。

『新高新報』文芸欄は常に情緒的なことばによって新民報を攻撃したが、批判の中心人物が頼明弘であった。例えば、確認せず「新民報が小説の掲載を止めた理由は原稿料を節約するためである」といった噂を掲載し、あるいは「台湾XX報文芸欄は中国から剽窃してきた矛盾の『騒動』を昨日掲載し終えた。〔……〕再度一、二編を剽窃して掲載することを請う」とあざけった。彼は新民報を「三流新聞」と称し、原稿料がわずかであると批判している<sup>39)</sup>。

毓文は新高報に入った後、新民報文芸欄を批判し、中、南部の人士が文芸団体を組織し、北部の既存の団体「台湾文芸協会」と提携するよう呼びかけている<sup>40)</sup>。これは最も早い時期における全島的な文芸組織を公に提唱したものであり、まさに新民報に対する不満によるものであった。

新民報社は反自聯／反新民報の気運の下結集した文聯に対し

て当初は無警戒であり、社説においても「組織的な文芸運動」という点で肯定的であった<sup>41)</sup>。しかし、すぐに新民報は文聯の反対傾向に気づき、その後は反撃する言論を掲載するようになった。例えば、郭水潭の文章は、大会が招請した対象の多くがメディア関係者であるのに、「本島作家」の名で出席していることは厚顔無恥な行為であり、また徒に時間を消耗して審議しながら、集団的な討議を経ていない聯盟の組織章程も実質的な意味がないとはっきりと指摘している<sup>42)</sup>。

両者の摩擦は文聯成立後さらに白熱化し、『台湾文芸』上に関連する言論を見てとることができる。張深切は率先して自身の原稿が削られ、文聯同人の原稿が着服されたと公にした<sup>43)</sup>。

H T生は、台湾詩歌界が新民報の立場の変化、加えて日本における転向の風潮の衝撃によって泣き面に蜂となり、一九二九年から一九三〇年の間に島内で短期間活躍した左翼雑誌の進歩作家の転向を導いたと言及している<sup>44)</sup>。そこで言及される「熱血進歩作家」とはそうした創作者を指しているが、常に進歩分子が当時の共産主義、社会主義、孫文の農工思想の鼓舞を受けたラディカルな時期を、「プロレタリア文学」と「文芸大衆化」の輝ける一頁と見なし、拘泥していたことをあらわしている。毓文は新高報上で『伍人報』『洪水報』『明日』『赤道』を追想している<sup>45)</sup>。林克夫も「転向」の錯誤を清算するため、まず新

民報を「我々の文芸大衆化の園地」とすることができなかったことははっきりと認識しなければならぬと提起している<sup>46)</sup>。

文聯が反新民報言説を利用して文芸界の同盟を達成した際に効を奏した左翼の御旗は、「大衆文学」と「文芸大衆化」を区別する際により効果を發揮したが、その後文聯の左右の再分裂を導いた。張深切と楊達の「文芸大衆化」に対する認識には違いがあり、前者は民族性に、後者は階級性に偏向し、文聯の分裂を導いたのだった<sup>47)</sup>。この内部抗争において、島内の農工運動の中から登場した頼明弘も楊達とともに、上海、広東の台湾革命派運動に出自をもつ張深切を論難した。

一九三四年五月六日、全島文芸大会が開催された日は、頼慶が執筆した日本文小説「迷信——迷信の打破は第二世から」がちょうど脱稿した日であった。一九三一年三月創立の大溪革新会は迷信の打破、陋習の改良を目的として、創立三周年の際に『革新』専刊の発刊を計画し、李献璋が編集、毓文（廖漢臣）が発行人となつて、一九三四年一〇月に発行した<sup>48)</sup>。頼慶が旧民衆党系統の雑誌の招請を受けたという一事を、彼の立場の変化の前兆と見なすことができる。執筆停止の前年、彼は左への路線調整を試みたようである。一九三四年七月の現存する最後の作品「文芸的大衆化怎樣保障文芸家的生活（文芸大衆化はいかに文芸家の生活を守るのか）」の中では、新民報文芸欄の方向

を反省し、大衆文学に満足しない心情も露にしている<sup>49</sup>。しかしながら、彼の識字階層を対象とした創作の方向性とプロレタリア作家の間には、一すじの溝が存在した。彼は『台湾文芸』の主宰者から受け入れられなかったばかりでなく、より左路線の『台湾新文学』の創刊者である楊逵の批判も受けた。そして一九三四年の年末から一九三五年の初め、頼慶が重病であった数ヶ月間も、彼にとって文聯からの排斥と左からの批判を受けた苦々しい時期であった。

頼明弘や張深切と異なり、かつて日本のプロレタリア運動の洗礼を受けていた楊逵は、反新民報によってプロレタリア文学を発展させることはなかった。彼は、日本のプロレタリア文学理論の源流とセクトを弁別、紹介することに尽力し、その中から台湾の現実的要請に見合った文芸大衆化理論をうち建てようとした<sup>50</sup>。一九三四年の年末楊逵は幾度か頼慶の作品に論及し、「女性の悲曲」、呉希望の「豚」と自身の「新聞配達夫」はすべて論及に値するその年の作品であると認めている<sup>51</sup>。彼は頼慶と自らの小説をグループ分けし、比較評価している。第一グループは同じく新民報に連載された大衆啓蒙小説「女性の悲曲」と「新聞配達夫」であり、第二グループが『革新』から依頼された短編小説「靈籤（おみくじ）」と「迷信」である。そして、「靈籤」と「新聞配達夫」はどちらも「プロ小説中の先端を行

くもの」であり、「女性の悲曲」と「迷信」はどちらも「プロ小説のしり馬にのったもの」と結論づけた<sup>52</sup>。楊逵は、「両極端を行う二つのいい見本」によって、大衆文芸と大衆文学との差異を明らかにしたが、頼慶の大作はその最もよい反面教師となったのだ。

これまで述べてきたところをまとめると、反新民報運動は過激な行動の後、次第に文芸欄における言論戦へと転化した。プロレタリア進歩言説の下、新民報は自聯と関係する企業の性質、そして報道中心のメディア的形態から、かつての本島人の進歩メディアを代表する地位を維持することができず、新たな商業戦略を立て、それに連関してその文芸欄の方向性にも影響が及んだのだ。そのとき、新高文芸欄はラディカルな立場の本島人を用い、自らを進歩的な位置に置くと、新民報に「資本主義新聞」「資本家の言論工場」「土豪劣紳の御用雑誌」という反動のレッテルを貼った。「文芸大衆化」という考えは、文聯成立大会において広く注目され、プロレタリア作家であれ、郷土文学者であれ、みな農工運動と共に闘うという共通認識をはっきりと示していた。しかしながら、日刊新民報は力及ばずその動向に比べられず、その文芸欄は大衆化の手段として郷土文学および大衆文学を展開したが、郷土文学はプロレタリア作家の批判を受け、読者を獲得するための大衆文学もまた郷土文学を失

望させ、極左、半左からの罵声が絶えることがなかったのだ。

郭水潭が言うように、台湾においてはまさに「左右身処し難し」であった。日刊新民報が、一九二〇年代の新文化運動の旗手、新文学の揺籃という評判から多くの人々から指弾される「モダンボーイ」へと失墜したことは、プロレタリア派が自聯派を排斥したという背景の下に発生したのであった。広く知られていた頼慶は異なる系統の作家らの議論を招き、左の言説の中に立脚できなかつた彼は、没落の一途をたどるしかなかつた。しかしながら、この忘れられた「新民報作家」から見えるのは戦場のごとき、一九三〇年代台湾の文学場における再編と再分化という複数の力の交戦の様相であつた。

## 五 結論

頼慶は、大衆作家であるとともに行動派作家でもあつた。頼慶の台頭は、日刊新民報の大衆文学戦略の結果であつた。モダ

ン化は、新民報が圧力に満ちた背景下における反応であり、それは郷土文学と同じく新民報の大衆化した思考下の産物であつたが、郷土文学と比べてさらに当時に於いて受け入れられることはなかつたのだつた。プロレタリア文学、郷土文学から大衆文学というスベクトルの中で、頼慶は最も右側にいた。彼が高騰暴落した事例は、左の輿論と異なる総督府の検閲、そして新興メディアなどの外部からの挑戦をはっきりと示しており、それは民族内部から新民報の経営者およびその作家に脅迫感をもたらした。双方とも文芸欄を左右が論争する戦場となし、最終的に新民報文芸欄を次第に大衆文学の代表的な園地へと転形させていったのだつた。その結果、一方でより多くの大衆文学や消費文化の生産をリードしたが、他方で反対者の結果を刺激し、文聯が創立されて『台湾文芸』が発行され、またその中から分裂して『台湾新文学』が生まれ、台湾最後のラディカルな文芸運動が継続されたのであつた。

附表一・頼慶著作目録初編（一九三二—一九三四）柳書琴編

文の種類	★未発掘 ☆不完全 タイトル	発表場所	刊行・掲載状況
随筆二編	☆闘争意識（一〜四）	台湾新民報	一九三二年七月二五日、第一三画。八月八日、第一五画。
郷土誌一種	僕の悩み	民衆法律 （台中：民衆法律新報社）	第二卷九号、一九三三年九月、四八―五一頁。
雑論一〇編	土地開発、庄治変遷、名勝 旧跡、地名由来、教育義会、 学校教育沿革、庄内保甲	北屯庄郷土誌 （臺中：北屯公學校）	一九三二年一月。
	☆趣味之科学（二）	台湾新民報	一九三二年五月二五日、第一一面。
	★台湾文学的展望	台湾新民報	一九三二年、日付不明。
	★愛の問題	台湾新民報	一九三二年、日付不明。八月以前のはず。
	★可憐啊！ 女性	台湾新民報	同右。
	★標題不明	台湾新聞	文芸欄、日付不明。
	☆姓名縦横談（一、四）	台湾新民報	一九三三年六月二六日、第六画。七月七日、第六画。
	休夏中の留学生	新高新報	一九三三年七月二一日、第一三画。
	答点人先生の「争屍」の 批評	新高新報	一九三三年七月二一日、第一三画。七月二八日、第一四画。
	★我对文芸大会之管見	台湾新民報	一九三四年五月、日付不明。
	文芸の大衆化怎樣保障文 芸家の生活	先發部隊 （臺北：臺灣文藝協會）	創刊号、一九三四年七月、五―七頁。
図書紹介 二編	童話読本	台湾新民報	一九三三年一月一九日、第四画。



			小説一〇編
	童話読本	台湾新民報	一九三三年一月二十六日、第三面。
	★骸の恋	台湾新民報	一九三三年三月一日、紙面不明。
	★スリ二重奏	台湾新民報	一九三三年、日付不明。
	☆美人局	台湾新民報	現存するのは第一―四四回(第三八、三九回が欠)、一九三三年五月一日―七月八日。第四五回以降は新聞紙が存在せず。
	☆争屍(上、下)	民衆法律 (台中：民衆法律新報社)	第二卷五、六号、一九三三年五、六月、五五―五九頁。(上)は存在せず。
	活ける屍	民衆法律	第二卷七号、一九三三年七月、六〇―七〇頁。
	★夜驚	台湾新民報	一九三三年、日付不明。
	☆女性の悲曲	台湾新民報	現存するのは第二五―八一回(第四二回が欠)、一九三三年九月一日―十一月二〇日、第八一回以降は新聞紙が存在せず。
	妾御難	フォルモサ (東京：台湾芸術研究会)	第二号、一九三三年二月、五八―六七頁。
	★色餓鬼	台湾新民報	不明。
から	迷信：迷信打破は第二世	革新(大漢：大溪革新会)	一九三四年一〇月、八九―一〇一頁。

- (1) 幸い存在する部分は次のものを含む：一、中島利郎寄贈『一九三三年台湾新民報』（一九三三・五・二一—一・三〇）（台南：国立台湾文学館・国立文化資産保存研究中心籌備処、二〇〇一年）、デジタル資料。二、楊肇嘉寄贈、李承機主編『六然居存日刊台湾新民報社説輯録一九三二—一九三五』（台南：国立台湾歴史博物館、二〇〇九年二月）、デジタル資料。三、楊肇嘉寄贈、李承機主編『日刊台湾新民報創始初期（一九三二・四・一—一五・三）』（台南：国立台湾歴史博物館、二〇〇八年七月）デジタル資料。
- (2) 李承機「台湾近代メディア史研究序説——植民地とメディア」（東京：東京大学大学院総合文化研究科博士論文、二〇〇四年五月）。李承機「植民地台湾「輿論戦線」之変遷——〈輿論〉兩義性的の矛盾与「台湾人唯一之言論機関」の困境」『六然居存日刊台湾新民報社説輯録一九三二—一九三五』、デジタル資料。李承機「日本植民地統治下「台湾人唯一之言論機関」的「苦闘」——日刊『台湾新民報』創始初期史料解題」『日刊台湾新民報創始初期（一九三二・四・一—一五・三）』、デジタル資料参照。
- (3) 吉開右志太著、黃得峰訳『台湾海運史』（台北：国史館台湾文獻館、二〇〇九年六月）、八四頁。
- (4) 追風「彼女は何処へ？ 悩める若き姉妹へ」
- 『台湾』三：四一七、一九二二年七月—一〇月  
 (5) 林輝焜「争へぬ運命」（台北：台湾新民報社、一九三三年四月）。
- (6) 劉捷「一九三三年の台湾文学界」『フォルモサ』二、一九三三年二月、三三—三四頁  
 (7) 無署名「蕪眉船「南音」一：一、一九三二年九月、九一—一〇頁  
 (8) 鍾肇政、葉石濤編『光復前台湾文学全集三：豚』（台北：遠景、一九八一年九月）、三四—三五頁  
 (9) 「大正九年後卒業の各科部」『台北市師範学校創立三十週年紀念写真真帖』（台北：台北師範学校、一九二六年一〇月）。
- (10) 『台湾総督府及所屬官署職員録』（台北：台湾時報発行所、一九三二—一九二九年度）を参照。  
 (11) 「闘争意識（一）」『台湾新民報』一九三一年七月二五日、第一三面。「闘争意識（二）」『台湾新民報』一九三二年八月八日、第一五面  
 (12) 許佩賢「愛郷心」と「愛国心」の交錯——一九三〇年代前半台湾における郷土教育運動めぐって」『日本台湾学会報』一〇、二〇〇八年五月、三—四頁、一〇頁を参照。  
 (13) 宮島虎雄編『郷土誌』（台中：北屯公学校、一九三二年二月）を参照。  
 (14) 若林正文「台湾抗日運動史研究」（台北：播种者、二〇〇七年三月）、一七一—一八二頁、二四六—二五〇頁を参照。
- (15) 台湾総督府警務局編『台湾総督府警察沿革誌（三）』（台北：南天書局復刻、一九九五年六月）、五六—五六六頁を参照。  
 (16) 「台湾自聯到竹山演講、文協農組較闘」『台湾日日新報』一九三二年七月九日、四面  
 (17) その当時の『台湾新民報』と『台湾新聞』は皆存在しない。本稿は頼慶「对最近文壇上の感想（一）」『新高新報』一九三二年八月二六日、第一七面 および毓文「同好者の面影（一）」『台湾新文学』一：二、一九三六年三月、九〇—九二頁を参照。  
 (18) 『台湾総督府警察沿革誌（三）』（五六一—五七〇頁）を参照。  
 (19) 『台湾新文学社大綱』（『台湾新文学』創刊号、一九三五年二月）、一頁  
 (20) 張頼玉廉「把青吟草：張頼玉廉詩集」（台中：晨星、二〇〇八年七月）、二一五頁を参照。  
 (21) 頼慶「立夏中的留学生」『新高新報』一九三三年七月二日、第三三面  
 (22) 李承機「日本植民地統治下「台湾人唯一之言論機関」的「苦闘」」一三一—一五頁、二二—二三頁、三〇頁  
 (23) 「文壇ス々メ」『第一線』創刊号、一九三四年二月、七頁  
 (24) 「編輯後記」『台湾文芸』二：二、一九三五年二月、一四九頁  
 (25) 楚女「評「先発部隊」」（『台湾文芸』創刊号、

- 一九三四年一月、七頁
- (26) 明弘「对最近文壇上の感想(一)」(『新高新報』一九三二年八月二六日、第一七頁)
- (27) 明弘「对最近文壇上の感想(二)」(『新高新報』一九三二年九月一六日、第一九頁)
- (28) 賴慶「答点人先生の「争屍」的批評」(『新高新報』一九三三年七月二二日、七月二八日、第一三頁、第一四頁)
- (29) 「文芸春秋」(『新高新報』一九三三年九月八日、九月一五日、一〇月六日、第一五頁、第一八頁、第一五頁)
- (30) 「新刊介紹」(『新高新報』一九三四年七月二七日、第一五頁)
- (31) 黄郛城「談談「南音」」(『台北文物』三・二、一九五四年八月、五六—六二頁)
- (32) 毓文「同好者的面影(一)」(一九二九頁)
- (33) 陳淑容「一九三〇年代郷土文学／台湾話文論争及其余波」(台南：台南市立図書館、二〇〇四年二月、二四—二四五頁)
- (34) 「台湾内閣の置土産? 潮に乗る新報許可理由」(『新高新報』一九三三年一月一四日、第三頁)
- (35) 「台湾新報不読者同盟籌備会」(『新高新報』一九三三年四月一四日、第一四頁)
- (36) 「冷言」(『新高新報』一九三三年三月一〇日、第一頁)
- (37) 「台湾新報不読者同盟籌備会」(『新高新報』一九三三年四月一四日、第一四頁、および「解剖新報」(『新高新報』一九三三年四月二二日、第二頁)
- (38) 劉捷は唐澤の主筆について肯定的に評価しているが、筆者はそうに考えない。劉捷著、林曙光訳『台湾文化展望』(高雄：春暉、一九九四年一月、一—二頁、一八—一八九頁、李承機「日本植民地統治下「台湾人唯一之言論機関」的「苦闘」、一三頁、一九頁を参照。
- (39) 弘「文芸春秋」(『新高新報』一九三三年九月二二日、一〇月二七日、第一五頁、第一五頁)
- (40) 毓文「就一九三三年の文壇說幾句笨話」(『新高新報』一九三四年一月一日、第四五頁)
- (41) 「台湾文芸の革新運動——对文芸大会希望」(『台湾新報』一九三四年五月六日)、何面かは不明。
- (42) 郭水潭「台湾文芸大会印象記」(『郭水潭集』一六八—一七一頁)
- (43) 張深切「文聯報告書」(『台湾文芸』二：一、一九三四年二月)、八—九頁)
- (44) H.T.生「詩歌的批評及其問題的、三」(『台湾文芸』二：四、一九三五年四月、一〇〇—一〇二頁)
- (45) 毓文「萎微不振の文学運動与瀰漫於作物的頽廢思想」(『新高新報』一九三三年一月二七日、第一八頁)
- (46) 林克夫「清算過去の誤謬——確立大衆化的根本問題」(『台湾文芸』創刊号、一九三四年二月、一八—二〇頁)
- (47) 趙熙達「台湾新文学」(一九三五—一九三七) 定位及其抵殖民精神研究(台南：台南市立図書館、二〇〇六年二月、一四、四四頁)
- (48) 李猷璋編『革新』(台北：大溪革新会、一九四四年一〇月)。
- (49) 賴慶「文芸の大衆化怎樣保障文芸家的生活」(『先発部隊』創刊号、一九三四年七月)、五—七頁)
- (50) 白春燕「普羅文学理論転換期的驍将楊逵——一九三〇年代台、日普羅文学思潮之越境交流」(東海大学日本文学専攻修士論文、二〇一二年六月を参照)。
- (51) 楊逵「台湾文壇一九三四年の回顧」(『台湾文芸』二：一、一九三四年二月)、七—三頁)
- (52) 楊逵「靈鐵と迷信——「革新」誌上における楊逵氏と賴慶氏」(『楊逵全集』台南：国立文化資産保存研究中心籌備処、二〇〇一年二月、八九—九四頁。初出は『台湾新聞』一九三四年一月(散逸)